清水正の

一里一尺

～自然をたずねて～ ㉒

早春から初夏へ 黄橙のマンサク、薄紅のタニウツギ、真白のウツギ

ロゼットの草の早い スタートダッシュ

二月の末に少し寒気が緩み、暖かい日が続きました。待ちわびたかのように山科川の土手に幾つかのセイヨウタンポポの花が開きました。路傍の隙間には背の低いミチタネツケバナの蕾が少し開き白い色を見せています。植物は敏感で少しの暖かさを感じて早速動き出したようです。よく見ると毎年いち早く咲くカラクサケマンが橋のたもとに絡みつくように群れをなして咲いています。セイヨウタンポポもミチタネツケバナもロゼット状の葉で冬を過ごし、一から葉を出す他の草よりもスタートダッシュが早いようです。後者は成長早く、あれよあれよという間に花茎を伸ばし背が高くなり蕾が開きます。ミチタネツケバナはヨーロッパ原産の帰化植物で、路傍、農道、畦、河川の土手などの乾いた所で生育を広げています。この時期に畑の真ん中で地面を白に彩っているのは本種です。タネツケバナの仲間で皆さんの身近なものと言えばスーパーなどで売っているクレソン（オランダガラシ）があります。ステーキの横に添えたり、サラダとしても利用されます。これが結構逸出して、きれいな水路などで自生しています。わかる人は採って帰って食卓にのせているようです。

セイヨウタンポポ

ロゼット葉のミチタネツケバナ

「雑草」が主役の里の春

三月に入るとオオイヌノフグリやヒメオドリコソウ、ホトケノザなどがきれいな花色で眼を楽しませてくれます。畑は肥料が行き届いているのか群生となりピンクの

絨毯や濃赤紫色が塗り込められます。オオイヌノフグリの群生などはマクロで写真を撮ると、まるでネモフィラの花畑のようです。この時期、人里ではこうした「雑草」たちが主役です。ウメが満開となり、桜が咲き出すと主役は移り、木々の花が人の目を引くようになります。

オオイヌノフグリの群生

山里では街でみられない早春の花たちが目ざめて人を誘います。セリバオウレン、キクバオウレンなどに始まり、セツブンソウ、バイカオウレン、キクザキイチゲ、アズマイチゲ、ユキワリイチゲ、ミスミソウなど、何故かキンポウゲ科ばかりです。いずれも植物園や植栽で見る事はできても自生を見るのは困難になりました。しかし、どんな場所に生育しているのかとわかる自然の山野で見たいものです。

バイカオウレン(左下)とセリバオウレン(右上)

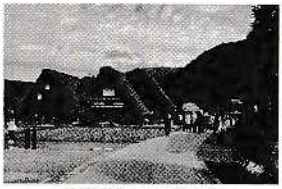
セツブンソウ

二つのマンサク

多くの樹木は草に比べて花が咲くのは遅いですが、前記の草花と同じ時季、山を彩る花にマンサクの仲間が有ります。ヒウガミズキ、トサミズキ、コウヤミズキなどで茶花としても使われるので知っている人も多いと思います。京都で自生が見られるのはヒウガミズキとコウヤミズキですが、コウヤミズキは京都府絶滅危惧種でもあり、特定地域にしか見る事ができません。いずれも下垂した花序に薄黄色の小さな花を付けます。種によって花の数は違います。私はこの花の実が裂開したときの種殻の形が面白く、正面から見たものを「ナマズの顔」と呼んで楽しみ、みんなに紹介しています。もちろんマンサクも早春の雪がとけるかとけない頃に枝先に黄色い花を幾つか固まって着けます。一つの花は細いリボン状の花弁を四枚付け、その基部にエンジ色の萼があり花芯が赤いように見えます。本種の変種としてマルバマンサクがあります。マルバとは普通のマンサクと違い葉の先が尖らず丸くなっていることからです。これは北海道

西南部から本州日本海側に分布します。日本では太平洋側と同様の種が日本海側の多雪地域に対応して変異したものが多くあり、マンサクもそのひとつと言えます。多雪に耐えるように木はしなやかで、雪の重みでも枝折れはせず曲がったまま雪に埋もれ、雪融けと共に元に戻ります。こうした粘り強い性質を使って白川郷の合掌造りなどの部材を繋ぎ結ぶのに使っていたと説明板に書かれていました。また朽木では輪かんじきを作るのに利用されていました。別名を「ねそ」とも言われ、結構人の生活の中に入り込んでいた木であったといえます。この花の名の由来は多くの人が知るように、冬が過ぎ、春が来るとまず最初に咲くところから「まんず咲く」と言われ、訛ってマンサクとなったと言われます。そういった意味ではフクジュソウなども同じで、フクジュソウをマンサクという地域もあるようです。しかし同じ名ではややこしいことからフクジュソウは「土マンサク」と別称を持つようになったと記すものもあります。マンサクについてこんな詩を見つけたので紹介してみたい。

マルバマンサク(地方名ネソ)


白川郷の合掌造り

白い自由画

「春」という題で
私は子供たちに自由画を描かせる

子供たちはてんでに絵の具を溶くが
塗る色がなくて途方に暮れる
ただ まっ白い山の幾重なりと
ただ まっ白い野の起伏と
うっすらとした薄墨の陰影の
所々に
突き刺したような疎林の枝先だけだ

私はその一枚の空を
淡いコバルト色に彩ってやる
そして 誤って まだ濡れている
枝間に
ぽとり!と黄色のひと雫を滲ませる

私はすぐ後悔するが
子供たちは却ってよろこぶのだ
「ああ まんさくの花が咲いた」と

子供たちはよろこぶのだ

丸山　薫　詩集「北国」より

初夏の訪れ
～タニウツギとヤブウツギ～

桜も満開となり喧噪な花見も終えると、足早に春も過ぎ去り初夏の訪れです。いや最近の気候では真夏になっているかもしれませんね。ともあれ五月に入ると私の安曇川の山小屋周辺ではタニウツギの花が咲きほこります。蕾の頃は濃赤紫色で、花が開くに従って薄い紅色に変わっていきます。私はどちらかというと開いた時の方がほんのりとした感じで好きです。かつて山小屋へ行くまでの道の両横には薄紅のタニウツギに混じって一本の白花のタニウツギがあり大事にしていました。

タニウツギ

しかし道にしなだれてくるので、道路管理のためか伐採されてしまいました。惜しくてなりませんが、すでに伐られたものは戻りません。ただ萌芽が出てくれることを期待しましたが夢想に終わりました。私には美しい花で好きな樹木の一つなのですが、いろんな人から「火事花」とか「墓花」とか言われ忌み嫌われると聞きます。花は径二～四cm位の漏斗状の花が二～三個ずつ花序をなし枝に密に付きます。おまけに枝がしなだれるので折り重なり見事というほかありません。

ヤブウツギ

本種は滋賀の湖北や湖西、京都の北山などの日本海要素の気候のところで、林縁や道路脇など日当たりいい場所に自分の居場所を見つけて生育しています。皆さんも初夏のドライブにタニウツギ街道を走ってみませんか。

かつて武庫川渓谷や奈良県の宇陀地域に行ったとき、タニウツギとよく似た花を見つけました。しかし花が濃赤色で花弁の裏側には産毛が生えているものを見つけました。調べてみるとヤブウツギという種でした。こちらは太平洋側によく生育しているようで分布上の違いがあることがわかりました。

沢山のウツギの名を持つ植物

小学校の頃、学校で「卯の花の匂う垣根に時鳥早も来鳴きて忍び音もらす夏は来ぬ」を教わり、今

でも時々口ずさむことがあります。今思えば素敵な歌詞ですが、子どもの頃は「忍び音」って何だろうと意味もよくわかりませんでした。ここで言う「卯の花」とはウツギという樹木です。タニウツギと同じ頃、同じように道端や林縁で白い花を咲かせます。山道を走るとこんなにもウツギがあったのだと車窓から見ほれます。おからではあるまいし、どうして卯の花というのでしょうか。この花が咲く頃は旧暦の卯月（現在では温暖化の影響で少し季節はずれていますが）であったことが由来のようです。観察会で「これは卯の花ですよ。聞いたことあるでしょう」と促すと、誰かが必ず「♫卯の花の…」と歌いだします。そして「これが卯の花ですか」と興味津々。ウツギがとっても身近に感じる一瞬です。そして花に鼻を近づけます。匂いの確認です。おかしいなぁという顔つきが無邪気です。そうです匂いはしません。ここでいう匂いとは香りではなく、花が盛りに咲いているさまや花の色を表したものと解説されています。

ウツギ（別名：卯の花）

実はタニウツギとウツギ、同じくウツギという名前が付いていますが、別の科に属します。他にもノリウツギ、バイカウツギ、コゴメウツギ等々沢山のウツギのつく樹木があります。ウツギを漢字で書くと「空木」であり、茎が中空であることからその名がついたようです。従って中空となるものを「…ウツギ」とした。しかしこれを調べた方がおられ、そうでないものが多く、様々調べて「花の色が白い」「枝がしなだれるさま」「中空ではないが髄がある」などがウツギにこにているということで名付けられたのではと結論づけておられました。はて真偽の程は如何に。

もうすぐ夏ですね ちょっと出かけてみませんか

これを読み終えた頃、丁度ウツギが咲き始める時候だと思います。五月晴れの日、弁当を持って、一寸里山にハイキングに出かけませんか。きっと山道の両脇に薄紅のタニウツギや真白のウツギの花が迎えてくれると思います。少し奥に入れば、花や実が小さいヒメウツギや葉の裏が白いウラジロウツギなどの珍しいウツギにも出会えるかもしれません。